

■エッセイ

平泉周辺の文化遺産

佐々木 勝 (学芸部長)

平泉周辺の平泉文化関連遺跡

平成13年4月に世界遺産暫定リストに掲載された「平泉の文化遺産」は、平成20年の世界遺産委員会での審議・登録に向け、関連遺跡の発掘調査など準備作業が進行しています。

北奥羽に強大な勢力を誇っていた平泉藤原氏の足跡は、当然のことながら平泉町外にも延びており、「平泉の文化遺産」は平泉町周辺の市町村に広がっています。

ここでは平泉町周辺の文化遺産のうち、代表的な遺跡として一関市骨寺村^{ほねでら} 荘園遺跡^{しやうえん}と衣川村^{ちやうじゃがはらはいじ}長者原^{ちやうじゃがはらはいじ}廃寺跡について触れてみますが、この二つの遺跡は、現在、国史跡指定に向けた取組みが進められているほか、世界遺産登録の有力な候補地ともなっています。

骨寺村荘園遺跡

骨寺村荘園遺跡は、中尊寺に伝来する中世の農村絵図で、平成7年に国の重要文化財となった「陸奥国骨寺村絵図」に描かれている場所にあたり、一関市巖美町の本寺地区に村落として現存しています。

「陸奥国骨寺村絵図」はいわゆる荘園絵図の一つですが、水田や在家を詳細に描いているものとして有名で、散村的な集落の景観が具体的に把握できるようになっています。

骨寺村荘園遺跡は、この荘園絵図に描かれた景観を今まで引き継いできた山間の村落ですが、水田の形状や水利・用水系統に至るまで往時の面影をとどめており、大分県の田染^{たしづのしょう}荘遺跡^{ひののしょう}や大阪府の日根野^{ひののしょう}荘遺跡と並んで全国的にも注目されています。

このため、骨寺村荘園遺跡は多くの研究者に注視されることとなりましたが、平成5年に放映された大河ドラマ「炎立つ」を契機として、本寺地区住民を会員とする「美しい本寺推進本部」が発足するなど、この荘園遺跡に対する地元の関心が一気に

高まりました。

その後、國學院大学教授吉田敏弘氏を中心とした歴史地理学的研究や、東北学院大学教授大石直正氏を委員長とする骨寺村荘園総合調査などが進められてきました。

この間、本寺地区を対象とした県営の圃場整備事業計画が持ち上がり、骨寺村荘園遺跡の保存・活用計画が文化財保護側の行政的な課題となったことから、一関市教育委員会によって発掘調査などの考古学的研究も行われることとなりました。

なお、これら調査研究の詳細な成果は『骨寺村荘園遺跡一岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第5集』として平成16年3月に発刊されています。

長者原廃寺跡

長者原廃寺跡は、衣川を挟み中尊寺の北方約1 kmに位置する遺跡で、方形にめぐると土塁跡や礎石が残存し、古くから金売吉次の屋敷跡として伝えられてきました。

これまで数次に及ぶ踏査や発掘調査が行われ、遺跡の重要性は指摘されてきましたが、性格や造営年代など、その具体的な内容が不明なまま現在に至っています。

長者原廃寺跡は、現存する礎石の配列や建物の配置、方形にめぐると土塁跡などから寺院跡との想定がなされていましたが、昭和33年に実施された発掘調査でも本堂跡、南門跡、西方塔(建物)跡、大溝などを確認し、その想定^{たしづのしょう}の傍証^{ひののしょう}となりました。

平成15年に至り、最大の課題である造営年代の把握をはじめ、多くの課題を解

明するため、岩手県教育委員会を中心として発掘調査が再開され、県立博物館も「前平泉文化の研究」の一環として調査に加わりました。

調査の結果、造営の上限年代が明らかになるなど、いくつかの新たな知見が得られましたが、課題が山積していることから、今年度から衣川村教育委員会によって本格的な発掘調査に着手しています。

世界遺産と文化的景観

世界遺産条約における「文化的景観」という新しい概念が広く浸透し、日本でも平成15年6月には「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究(報告)」が取りまとめられるに至っています。

この「文化的景観」という新しい概念と、中世の荘園景観を今にとどめる骨寺村荘園遺跡や、安倍・藤原氏の関連遺跡が林立する衣川流域遺跡群の中で、独特の歴史的景観をつくりだしている長者原廃寺跡の原風景は、見事な調和をみせています。

この意味においても、両遺跡は「平泉の文化遺産」の世界遺産登録コアゾーンの候補としてきわめて適切な遺跡であると考えられています。



長者原廃寺本堂跡